

これからの教員に求められる資質能力を育成するために

—教職に関する科目における心理尺度の活用—

神谷 真由美

キーワード：教員養成 愛着スタイル 大学生

1. 問題と目的

近年、職場におけるメンタルヘルス不調が社会的な課題となっている。文部科学省、教職員のメンタルヘルス対策検討会議 (2013) によると、公立学校教職員の病気休職者は、平成4年度 (1111人) から平成21年度 (5458人) にかけて17年連続して増加している。このうち精神疾患による病気休職者が占める割合は、平成4年度は0.11%であるが平成21年度には0.60%となり、平成22年度は0.59%、平成23年度は0.57%と若干減少したものの、依然として高水準にある。このような現状のなか中央教育審議会 (2012) は、これからの教員に求められる資質能力として、(i) 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力 (使命感や責任感、教育的愛情)、(ii) 専門職としての高度な知識・技能、(iii) 総合的な人間力 (豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力)、の3つを挙げた。

3つの資質能力のうち、(iii) 総合的な人間力と関連する概念に、愛着理論 (Bowlby, 1953, 1969 黒田他訳 1976) が考えられる。愛着理論では、人は、幼児期に主要な愛着対象との間で経験された相互作用を通して、自分の周囲の世界や自己及び他者に関する心的表象 (内的作業モデル) を形成する。この内的作業モデルに基づいて、その後の出来事の知覚、未来の予測、行動を決定する。このような内的作業モデルに基づく典型的な行動パターンが、愛着スタイルである。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) は、母親との分離・再会時における幼児の行動パターンを観察する実験観察法により、愛着スタイルの3分類を見出した。3分類とは安定型と、2種類の不安定型 (回避型、アンビバレント型) である。安定型の幼児は、母親との分離に対して感情的な行動を取るが、母親との再会で落ち着く。回避型は、母親との分離・再会に無関心であったり、回避的行動を示す。アンビバレント型は、母親との分離に強い不安を示し、再会後も気分が回復しない。

その後 Hazan & Shaver (1987) は、自己報告による単一項目強制選択法の質問紙調査により、愛着スタイルの3分類が、幼児期だけでなく青年や成人においても同様に認

められることを示した。3分類の特徴を Table 1 に示す。詫摩・戸田 (1988), 戸田 (1988) は, Hazan & Shaver (1987) に基づき, 「安定」「アンビバレント」「回避」の3下位尺度から構成される多項目の成人版愛着スタイル尺度を作成している。

Table 1
Hazan & Shaver (1987) の研究における成人の各愛着スタイルの説明と特徴
(金政・大坊, 2003, p. 60, Table 1)

	愛着スタイル		
	安定型	アンビバレント型	回避型
愛着に関する描写の主な内容	親密さや依存を快く思っており, また, 対人関係における不安もない	極端な親密性を対人関係に求め, 相手から見捨てられることや愛の欠如への不安を感じている	親密さを不快に感じており, 他人に依存することを嫌う
愛着経路(両親の印象)	両親との関係を温かいものであるとみなしており, 両親を尊敬している	父親を不公平であるとみなしている	母親を冷たく, 拒否的であるとみなしている
作業モデル	他人と仲良くなりやすく, 自己不信はあまり見られず, 他人を善意ある者と見ており, 愛を長く続くものであるとしている	自己懐疑的で他者から誤解を受けていると感じやすく, 真実の愛はまれなものであるとみなし, 他人は自分に関与することを望んでいないと思っている	愛情をあまり続かないものであるとみなし, 時間とともに次第に弱まっていくものであると思っている
恋愛における経験	幸せで, 信頼できる, 友情のある関係 (パートナーに友情を感じやすい)	相手への没頭 (嫉妬や脅迫的な感情を相手に感じる), 性的に強く惹きつけられており, 感情の起伏が激しい	親密さからの回避や不安, 相手を受け入れにくい

上述した愛着スタイルは, 対人関係のもち方にも密接に関係しており, 上記の総合的な人間力のなかでも, 特にコミュニケーション力, 連携・協働できる力との関連が考えられる。そのため教員を目指す大学生が, 自分がどのような愛着スタイルの特徴をもっているか理解を深めることは, これからの教員に求められる資質能力を育成するうえで重要である。以上から本研究では, 教職に関する科目において, 大学生に成人版愛着スタイル尺度 (戸田, 1988) を行い, 自身の愛着スタイルの特徴を内省する課題を実施し, その効果を検討することを目的とした。

2. 方法

対象者

教職に関する科目を受講している大学生 237 名を対象とした。1 年生が 229 名, 2 年生以上が 8 名であった。

尺度

戸田 (1988) の成人版愛着スタイル尺度を実施した。「安定 (項目例: 私はすぐに人

と親しくなる方だ)」、「アンビバレント (項目例: 時々、友達が本当は私を好いてくれていないのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある)」、「回避 (項目例: あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう)」の3下位尺度で構成される。項目の評定は、“全くあてはまらない (1点)”～“非常によくあてはまる (6点)”の6段階であり、得点が高いほどその要素が強いことを示す。「安定」6項目、「アンビバレント」6項目、「回避」6項目の全18項目からなる。

手続き

調査は、2013年5月に行った。教職に関する科目の授業で、筆者が幼児期の愛着スタイル、青年の愛着スタイルに関する講義を行った後、受講者に成人版愛着スタイル尺度の実施を求めた。採点は、対象者自身が行った。そして、以下の2つの課題を出し、その場で提出を求めた。①成人版愛着スタイル尺度の3下位尺度の得点を記述する。②得点から考えられることや、自分自身への気づきを記述する。課題の回答には、A5サイズの内紙を用い、所要時間は10～20分であった。

3. 結果と考察

対象者の愛着スタイル

課題①の成人版愛着スタイル尺度の3下位尺度得点の記述から、対象者の成人版愛着スタイル尺度の平均値、標準偏差を算出した。Table 2 に示した。

Table 2
成人版愛着スタイル尺度の平均値・標準偏差

	安定	アンビバレント	回避
平均値	21.01	20.59	17.79
標準偏差	5.79	6.33	5.51

愛着スタイル特徴の内省

課題②の成人版愛着スタイル尺度得点から考えられることや、自分自身への気づきの記述を質的データとし、以下の手順で分析を行った。①無作為に抽出した75名の対象者の記述に、初期コードを付与した。初期コードは、記述の内容のまとまりによって付与するため、1名の記述に対して複数付与することもあった。初期コードの付与例を、Table 3 に示す。②初期コードの特徴を整理し、類似したものをまとめ、下位コード、上位コードを作成した。③残りの162名の対象者のデータを照合しながら、コードの精緻化を行った。分析の結果、4個の上位コードと15個の下位コードが得られた。上位コード、下位コード、下位コードがみられた人数をTable 4 に示す。

以下に、上位コード、下位コードの内容を示す (上位コードは〈〉で、下位コードは『』で表す)。まず、上位コードの〈結果について〉は、成人版愛着スタイル尺度の得点結果に関する内容であった。『予想通り』『予想外』『気づき』『納得』『分からない

Table 3
初期コードの付与例

記述例	私は、「安定」得点が高いと思っていたので予想外の結果でした。しかし、この結果をよく考えると、確かに、本当は人に頼りたいけれど、それがなかなかできずに、一人で解決しようとすることに気づきました。これからの大学生活では、積極的に人と協力して関わられるよう、心がけたいと思いました。
初期コード例	<ul style="list-style-type: none"> ・予想外の結果 ・よく考えると気づき ・人に頼りたいが、一人で解決しようとする ・今後は、積極的に人と協力して関わりたい

い』『当てはめ』の6個の下位コードから構成された。『予想通り』と『予想外』については、尺度実施前に対象者自身が予想していた自分の愛着スタイルと、予想通りの結果であったか、それとも予想外の結果であったかという内容であった。『気づき』は、得点結果から自分の愛着スタイルをふりかえり、新しい一面に気づくという内容、『納得』も同様に、得点結果から自分をふりかえり、自分の特徴について理解を深めるといった内容であった。『分からない』は、得点結果と自己像が結びつかず、どのように理解したらよいか、よく分からないという内容であった。『分からない』がみられた11名のうち2名は、成人版愛着スタイル尺度の3下位尺度得点の得点差が小さく、「全ての点数がそろってしまって疑問です」のように、解釈が困難になっているようであった。『当てはめ』は、自分の愛着スタイルの特徴をふりかえることなく、得点結果から考えられる典型的な愛着スタイルの特徴や質問項目に自分を当てはめる内容であった。

〈自分について〉は、得点結果から、自分の心理状態をはじめ、自分自身についてふりかえる内容であった。『変化のふりかえり』『自信がない』『感情の起伏』の3個の下位コードから構成された。『変化のふりかえり』は、例えば「高校生から、人との関わりを意識し始めた」のように、自分自身をふりかえり、得点結果から考えられる愛着スタイルの特徴が、いつごろからそのようになったかを記述した内容であった。これは、現在の自分は過去から連続した自分であるという感覚であり、Erikson (1950 仁科訳 1977, 1980) のいう連続性との関連が推察される。『自信がない』は自信のなさに関する内容、『感情の起伏』は感情の起伏や気分の変動に関する内容であった。

〈対人関係について〉は、自身の対人関係のもち方に関する内容であった。下位コードは、その対人関係の対象から、『対人関係全般』『友人関係』『親子関係』『恋愛関係』の4個から構成された。『対人関係全般』は、対人関係全般に関する特徴を記述した内容であった。『友人関係』は友人関係での特徴や友人への感情、『親子関係』は親子関係での特徴や親への感情、『恋愛関係』は恋愛関係での特徴や恋人への感情に関する内容であった。

〈今後について〉は、得点結果から考えられる自身の特徴をふまえて、どのようにこれから過ごしていきたいかという内容であった。『理想像の確認』『自己分析への関心』の2個の下位コードから構成された。『理想像の確認』は、例えば「もっと積極的

になりたい」「性格を改善したい」など、自分の理想像を確認する内容であった。『自己分析への関心』は、今後も自分自身の性格や特徴について理解を深めていきたいという内容であった。

Table 4
愛着スタイル特徴の内省

上位コード	下位コード (人数)	例
結果について	予想通り (n=23)	・私の思っていた通りだった ・予想通りの結果だった
	予想外 (n=44)	・自分は安定型だと思っていたので、意外にも抵抗型ということにびっくりした
	気づき (n=30)	・尺度をやってみて、私は一人でのいるのも好きなのだなど、改めて思い知らされました
	納得 (n=31)	・結果に納得しています
	分からない (n=7)	・得点がそんなに高くないのは、どういうことか分かりません
	当てはめ (n=11)	・項目を見ると、自分に自信がなくて、いじっぱりなのかと思った ・点数から、人と接するのは苦手ではないのかもしれない
自分について	変化のふりかえり (n=30)	・高校生から、人との関わりを意識し始めた ・小学校高学年から、今のような自分になっていった
	自信がない (n=57)	・あまり自分に自信がもてない
	感情の起伏 (n=21)	・精神状態が不安定などはすごく心当たりがあります ・あまり、自分の感情が表に出ることがない
対人関係について	対人関係全般 (n=138)	・人と親しくしたい反面、嫌われないか心配になることがある ・人と仲よくなるのが嫌ではなく好き
	友人関係 (n=36)	・友達にはあまり依存しないタイプ ・友達が欲しくないわけではないが、面倒臭さも感じる
	親子関係 (n=66)	・親を尊敬していない訳ではないが、嫌だと感じることも多かった ・両親を尊敬しているような感じがある
	恋愛関係 (n=18)	・恋人と少し連絡がとれなくなると、不安になってしまいます
今後について	理想像の確認 (n=42)	・大学生生活を過ごす中で、少しでも不安を解消し、自分を高めたい
	自己分析への関心 (n=9)	・自分の性格を見直したいと思った

まとめ

本研究の目的は、教員を目指す大学生に、自身の愛着スタイルの特徴を内省する課題を実施し、その効果を検討することであった。対象者の記述を質的データとし、分析を行った結果、〈結果について〉〈自分について〉〈対人関係について〉〈今後について〉という4個の上位コードが得られた。これより、自身の愛着スタイルを測定する心理尺度を実施し、内省する課題によって、大学生が自分自身をふりかえり、自分の特徴や対人関係、今後のあり方について考えるきっかけとなったことが示された。

しかし、自身を内省することなく、尺度の項目内容や典型的な愛着スタイルの特徴

をそのまま当てはめる大学生や、自分について「分からない」と記述する大学生もいた。成人版愛着スタイル尺度の3下位尺度の得点で、差があまりみられない場合、自分の愛着スタイルの特徴をふり変えるのが困難であったかもしれない。そのため、課題を教示する際には、例えば、「得点の差がみられなくても、当てはまった質問項目に注目し、自分をふりかえてみよう」など、内省をより促すように工夫する必要がある。また、成人版愛着スタイル尺度に限らず、パーソナリティや対人関係のもち方の特徴を測定する尺度などを用いることも、教員を目指す大学生が、自分について理解を深めるうえで有効であると考えられる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Bowlby, J. (1953). *Child care and the growth of love*. Harmondsworth: Penguin Books.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss*. Vol. 1. *Attachment*. London: Hogarth Press.
(ボウルヴィ, J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子 (訳) (1976). 母子関係の理論—— I 愛着行動—— 岩崎学術出版社)
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
(エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児期と社会 1, 2 みすず書房)
- Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized and an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, **19**, 59-76.
- 教職員のメンタルヘルス対策検討会議 (2013). 教職員のメンタルヘルス対策について (最終まとめ) 文部科学省 平成 25 年 3 月 29 日
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2013/03/29/1332655_03.pdf) (2013 年 7 月 1 日)
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度——成人版愛着スタイル尺度作成の試み—— 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル——作業仮説 (working models) からの検討—— 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 27.
- 中央教育審議会 (2012). 教育生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申) 文部科学省 平成 24 年 8 月 28 日
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf) (2013 年 7 月 1 日)

(信州大学 全学教育機構 専任講師)

2014 年 1 月 21 日受理 2014 年 1 月 28 日採録決定